

平成28年度 学校版環境 ISO の取組 概要報告

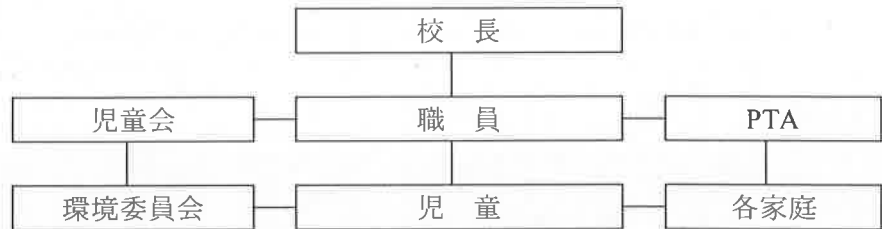
宇城市立海東小学校

1 学校の実態

本校は、2012年12月、ユネスコスクールに加盟し、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) の推進校として、環境学習を中心に取り組んでいる。本校の子供たちはそのことを生かし、様々な活動を行いながら、学校教育活動全体で環境教育に取り組んでいる。

2 組織作り

活動については、児童会の環境委員会を中心に、全児童・全職員で取り組んでいる。



3 宣言文

環境委員会が中心になって、本年度の宣言

項目を検討した。児童集会において全児童に提案し、今年度の方向性を決定することができた。なお、職員についても以下の宣言のもと取り組んでいる。

(1) 児童

- ・河川学習を生かし、節水に努めます。
- ・子供服を集め、リユースに努めます。
- ・燃やすゴミを減量し、リサイクルに努めます。



【児童集会でのISO宣言】

(2) 職員

- ・必要のない電気を消し、節電に努めます。
(電気使用量昨年比-3%)
- ・裏面印刷、両面印刷に努め、紙の消費を抑えます。
- ・ゴミの分別をし、ゴミの量を減らします。
- ・水道の水を節約します。
- ・河川学習を積極的に展開します。



【職員室の裏紙利用】

4 取組の実際

(1) 「河川学習を生かし、節水に努めます。」

本校では、1年生から6年生まで計画的に取り組む「河川学習プログラム」を策定し、川を一つの題材として学習を進めている。低学年は主に川で遊び、生き物に触れる。中学年は、川と地域とのかかわりを知り、高学年では環境問題等と関連づけながら学んでいく。5年生の「水俣に学ぶ肥後っ子教室」も河川学習の中に位置づけ、系統的に学んだことを節水、水質保全の意識へとつなげた。

【校内に貼られた節水ポスター】



1	「ふるさとの川に学ぼう」 ～すばらしい水環境は海東からⅡ～					
2	年					
3	1 年		2 年		3 年	
4	生活科 「水となかよし」		生活科 「砂川の生き物を見つけ ふれあおう」		総合的な学習の時間 「しょうがの町 『海東』」	
5	水環境を学ぶ。砂川で水を作り、水を通して砂川を元通りにして、休む水で遊ぶ。		川の生き物を見つけよう。川の生き物を見つけてふれあおう。生き物は川のどこにいますか。川での釣果や道具の安全な使い方を学ぶ。		砂川の水質調査や水生生物調査を通して水環境について理解すること。水質調査の結果や川の汚染について、自分の力で気づくこと。	
6	砂川に行こう。川での釣果や道具の安全な使い方を学ぶ。川で遊ぶ。川のお宝を見つけて、川のお宝を売って、学校に届けて楽しむ。道具の片付けをする。川で遊ぶことをテーマに発表しよう。		川の生き物を見つけてふれあおう。川での釣果や道具の安全な使い方を学ぶ。川で遊ぶ。川のお宝を見つけて、川のお宝を売って、学校に届けて楽しむ。道具の片付けをする。川で遊ぶことをテーマに発表しよう。		砂川の水質調査や水生生物調査を通して水環境について理解すること。水質調査の結果や川の汚染について、自分の力で気づくこと。水質調査の結果や川の汚染について、自分の力で気づくこと。	
7	10時間		10時間		40時間	
8	6、7、9月		6、7、9月		通年	
9	水とふれあい、水の楽しさを味わうとともに、水のかわさにも気づくことができる。気づくことを通して、川を言葉や絵などで表現することができる。		川の生き物を見つけてふれあおう。生き物とふれあう活動を通して、水と川の関わりについて理解することができる。川を言葉や絵などで表現することができる。		砂川の水質調査や水生生物調査を通して水環境について理解すること。水質調査の結果や川の汚染について、自分の力で気づくこと。水質調査の結果や川の汚染について、自分の力で気づくこと。	
10	①川の水質調査 ②水生生物調査 ③川の水質調査 ④水生生物調査 ⑤川の水質調査 ⑥水生生物調査		①川の水質調査 ②水生生物調査 ③川の水質調査 ④水生生物調査 ⑤川の水質調査 ⑥水生生物調査		①川の水質調査 ②水生生物調査 ③川の水質調査 ④水生生物調査 ⑤川の水質調査 ⑥水生生物調査	
11	保護者 消防署員		保護者 農業センター職員		宇城市環境調査員、保健師、NPO水たのびの会	
12	ふるさと海東の砂川や川の清流水をはじめとして水環境のすばらしさを理解し、ふるさとに愛着を持つことができる。		ふるさと海東の砂川や川の清流水をはじめとして水環境のすばらしさを理解し、ふるさとに愛着を持つことができる。		ふるさと海東の砂川や川の清流水をはじめとして水環境のすばらしさを理解し、ふるさとに愛着を持つことができる。	

【河川学習プログラム】



1, 2年生の川遊びの様子。川で採取した生き物は、1, 2年教室前の水槽で観察しました。子供たち同士のコミュニケーションも盛んになり、楽しい活動になっています。



5年生の環境センターでの水環境学習も、河川学習の一部に組み入れています。海の汚れ、川の汚れから、きれいな水を守っていくことの大切さを学びました。

(2) 「子供服を集め、リユースに努めます。」

本校では、ユニクロ「服のチカラプロジェクト」に参加している。この活動は、世界各地の難民のために、着なくなった子供服を送るという活動である。ユニクロの服にこだわるのではない事業だったので、環境学習の観点からも有効な活動だと考え、全校で取り組んだ。



ユニクロの社員の方による出前授業を行いました。難民の様子、自分たちにできること、活動の意義を感じ取ることができました。



みんなが持って来たくなるような回収箱を作りました。難民のためにできることをがんばりました。

校内にお知らせのポスターを貼りました。校内放送も使い、呼びかけました。最後には、学習委発表会でも呼びかけました。

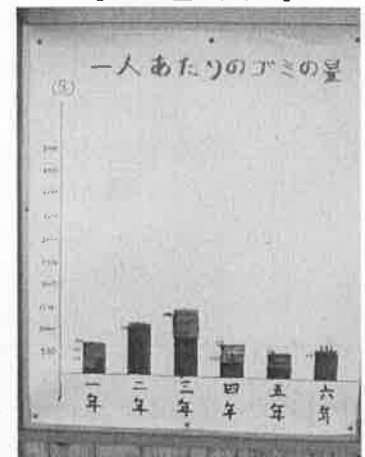


最終的に大きな回収箱 7 箱になりました。目標の 10 箱には届きませんでしたが、がんばりました。

(4) 「燃やすゴミを減量し、リサイクルに努めます。」

これまでも毎週水曜日を「環境の日」とし、環境委員会で各学級の可燃ゴミを集めることと、紙類に分別することを行ってきた。今年度は、せっかくするのだから、もっと減量の意識を持ってもらうために、各学級から出たゴミの量を測り、グラフに示した。

【ゴミの量のグラフ】



5 見直しについて

- (1) 本校は、地下水利用のため水の使用量は確認できない。しかし、常に子供たち同士で「コップ 1 杯の水で歯磨き」「バケツを使っての掃除」など声をかけ合っている姿がある。子供たちの姿を確認しながら節水に努めている。
- (2) 夏休み前の時点で集まった子供服が 2.5 箱であった。中心になって取り組んでいる 6 年生は課題に感じ、国語の学習と関連させ、もっと持ってきてもらうための呼びかけを行った。それ以降、順調に集まりが良くなった。また、学習発表会では、子供たちだけでなく地域に向けても呼びかけたことで、最終的に 7 箱集まった。
- (3) 集められたゴミの量は学年によって差があった。しかし、学級の数も違うことから、環境委員会でグラフを一人あたりのゴミの量にして提示した。また、ゴミを回収した翌日の木曜日に放送で、ゴミの量を知らせることにしている。今後ゴミの量がどうなるか見守っていく。



【各教室での「服のチカラ」呼びかけ】



【学習発表会での「服のチカラ」呼びかけ】

6 成果と課題

(1) 成果

- ・ 河川学習プログラムに取り組み3年目になる。子供たちにとってもともと身近であった砂川と更に触れ合うことができている。また、水俣病などの環境問題と同じ水としてつながっているという意識を持てたことが節水や水質保全の考え方につながっている。
- ・ 難民に服を送ることで世界の子供たちに自分たちが役に立つのだということを実感的に感じることができた。何となく、リユースの活動をするよりも目的と対象がはっきりすることで、意欲的に取り組むことができた。
- ・ ゴミの減量に今年から取り組んだ。ゴミの重さをグラフ化することで、「ゴミは少ない方がよい。」という基本的なことに気づいた子供も多かった。今後、ひと月の最小のゴミの量を示したりすることで、更に減量の動きを加速したい。

(2) 課題

- ・ ここ3年間様々な調査をしても砂川の水は「きれい」という結果が出ている。子供たちは「きれいな川を未来につなげる。」という気持ちになることができたが、いつも「きれい」故に危機感がないのも事実である。水俣病の学習などに関連を更に図り、節水の意識をもっと持てるようにしたい。
- ・ 「服のチカラプロジェクト」は、来年度も同じ取組ができるか分からない。今年度でたくさんの子供服を持ってきてもらった家庭にはもう残りはない。よって、ここで持つことのできたリユースの意識をつなげる次の活動を工夫したい。
- ・ ゴミの減量は、まだ果たされていない。委員会の取組としても、減量が実感できれば更に様々な展開を子供たちが考えることにつながると思う。今後も、活動の工夫を図りたい。

7 おわりに

宇城市 ESD 推進校として学校版環境 ISO の実践を中心とした環境教育を中核に据えて ESD の推進に取り組んでいる。各教科でも「持続可能な社会の形成者」として必要な資質の育成を一つの目標に取り組んできた。少しずつではあるが子供たちの意識が変容しつつある。今後も、児童が起点となり、児童が中心となる活動ができるように全職員で力を合わせていきたい。